

本日の学び テーマ:「主の召命から逃げるヨナ」 テキスト:ヨナ書1章1-16節

【理解の手がかりとして】

□ヨナ書のあらすじ

アッシリアの都ニネベに、審判の言葉を語るように神に命じられたヨナは、神の前から逃れて、タルシシュへ行こうとするが、大風に遭い、海になげ込まれて、大魚に呑まれたとき救いを祈ると、魚は彼を陸に吐き出し、遂に彼はニネベへ行って神の審判を預言した。するとニネベの人々はすべて悔い改めたので、神はニネベを滅ぼすことを止めてしまわれる。するとヨナは神に向かって怒り、なぜ自分をこうまでしてニネベへ連れてきたのかと迫る。神はヨナに、「お前の怒りは正当だろうか」と反問されたので、ヨナは審判が行われるものと期待して、町の東に小屋を造ってなりゆきを見守る。神は彼を暑さから救うため、とうごまを生えさせられ、ヨナはこれを大いに喜んだが、虫が来てそれを枯らせてしまった。ヨナは、とうごまを惜しんで神に抗議したところ、神はヨナに「まして神がニネベを惜しんで、滅ぼさないのは当然ではないか」と答えられた。

□ヨナ書の背景

ヨナ書は預言者の預言を集めた預言書ではなくて、イスラエル王ヤロブアム二世の時代の預言者としてその名を知られていたアミタイの子ヨナ（列王記下 14：25）の名を借りて作られた預言者物語である。

この物語は、ユダヤ人の選民意識の狭さをユーモラスに批判した作品である。バビロン捕囚後、解放されてイスラエルが帰還した時代が背景にある。紀元前5世紀後半、エズラ、ネヘミヤによる改革が行われ、ユダヤ教団の戒律が確立され、選民意識が再び強化された。ヨナ書はそういう民族的偏狭さを風刺した物語で、「選民イスラエルだけが救われる」という偏狭な信仰が正され、その対局にある神の愛の無限性が語られている。紀元前4世紀前半に作られたものと考えられている。

□1章1～16節概説

「主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ」（1:1）の「主の言葉が臨む」とは預言者物語の特徴（列王記上 17:8 参照）。しかし他の預言者は主の招きに戸惑いつつも従うことが通例だが、この物語は予想外の展開を示す。そこにこの物語の風刺と面白さがある。

ヨナは「ニネベ」への宣教を命じられる。ニネベはアッシリア帝国の大都市。紀元前12世紀から発展し、紀元前612年の滅亡まで繁栄を極めた。異邦人の代表、人間の築いた文明、高ぶりの象徴である。そのニネベの悪を指摘し、神の裁きを告げよ、というのがヨナに与えられた使命。「これに呼びかけよ」（1:2）とは神の裁きのニュアンスである。

しかしヨナはその召命に逆らう。彼が向かう「タルシシュ」はスペイン南西部の商業都市タルテソスをさすなどとの説がある。ニネベとは反対方向の極みに位置し、また一般的に「海」をさすとの解釈もある。海は旧約聖書の民にとって未経験の領域。つまり「主から逃れようと」（1:3）とあるように、主の支配から逃げようとしたのである。

4節から舞台は海上へ移る。突然の嵐が船全体をパニックに追い込む。船乗り達はそれ

それに信じる神々に助けを求めるが、ヨナは爆睡中。しかし叩き起こされて「あなたの神を呼べ」(1:6)と神との関わりを強いられる。ヨナが逃げようとした神に。

「くじ」(1:7)は神意を知る方法として聖書にも時折登場する(ヨシュ 17:1、サム上 14:41、使徒 1:26)。そしてそのくじがヨナに当たった。ヨナは言う。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ」(1:9)と。「ヘブライ人」という言い方は、他民族との区別が強調される場合に用いられる表現。立派な信仰表明のようであるが、実は行動においてはその神に反逆しているという矛盾がますます皮肉にも際立ってくる。「主を畏れる者だ」という言葉が空しく響く。他の船乗り達の方が、神の力と神への反逆がもたらす恐ろしい罰を深刻に受け止めている。

結果、ヨナは自分を海に投げ込めと言う。この意思をどう解するか。宣教拒否を貫徹する意図、身代わり、罪の自覚……。船乗り達は直ちにヨナを投げ込まず、なおも危機脱出のために必死の努力を続ける。そしてついに「主に向かって叫(ぶ)」(1:14)。その「主」が彼らの認識で共通するものが定かではないが、人知を越えた大いなる方(神・主)に対する小さき人間達の叫びである。そして最終手段として、ヨナを海に投げ込む。罪責に苛まれながら……。

そうすると「海は静まった」(1:15)。そこで彼らは「主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた」(1:16)、すなわち礼拝したのである。「聞き手には、ヨナが預言者として召されていながら英雄的な姿を失って、ならず者の様相を示し、逆に異教の人々がいまや主に忠実な信仰を表明する姿が鮮明になってくる。」(『新共同訳旧約聖書注解Ⅲ』より)。——「はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」(マタイ 8:10)。

(聖書教育より)

「この物語のテーマは、排他的で自己中心的な信仰を批判し、異邦人も主の愛と赦しの中にあることを示すところにあります。その意味で、ヨナ書は新約の福音と重なる物語です。」

(聖書の学び～ヨナ書のテーマ)

「二ネベの人々には災いがくだされるべきなのに、そこに主の赦しが起こるなんて不条理だとヨナには思えたのでしょ。……敵対する異邦人の都二ネベの救いというテーマも重ね合わせられることで、主に背を向けて逃げてしまったヨナの姿に深い苦悩を感じます。」

(聖書の学び～ヨナの苦悩)